

tab

No.
35

2
0
1
2
/ 10
/ 15

後藤美和子 / 野村龍 / 長尾高弘
福島敦子 / 岩田英哉 / 水島英己
秋川久紫 / 木村和史 / 吉田群青
倉田良成

糖 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

- 後藤美和子：返却／01
野村 龍：雪／02
福島敦子：メロン／03
長尾高弘：わずか十秒／05
秋川久紫：殺陣師の領分／06
岩田英哉：寒山拾得／07
吉田群青：警報／08
水島英己：汽水域／10
倉田良成：博物館のある通り・水の庭／14

文

- 岩田英哉：Hart Craneを読む。 3 — midnight press poetry rounge 2012/06/02-4c / 17
木村和史：マイケル／21
倉田良成：ハイド氏の庭を歩く―石原明句集『ハイド氏の庭』について／23

あとがき集／25

第35号／2012年10月15日

編集発行人／倉田良成

〒230-0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイッ201
Eメール／kateis11@k3.dion.ne.jp

後藤美和子

返却

借りた靴をどうやって返そう

レンガ色の森

群れ飛ぶのは、そこが暖かいからだ

微光であつても

何も知らなくても

私に残してくれたと考える

風を空に蒔く

原石は手の中の小鳥のように

放たれたことも知らない

辞書を読まない人を通じ

警笛を聞き、存在するかぎりの視力を介し

砂になつてともに飛ぶ

小さな橋が

列石に倒れる時も

竿が宙に、時を回して告げる日も

私は扉を探して歩く

ぬかるみのせいで白く輝く

この長靴を誰に返そう

(皆既蝕六五)

野村龍

雪

天使が燃え尽きる時
囁きは癒され

薄桃色をした蜃気楼の彼方に
金色の洋梨がしずかに浮かびあがる

枯れていく瑠璃玉を
毎晩なめし革で磨き

継ぎ接ぎだらけの声を

古い引き出しの奥に たいせつに仕舞っておく

《心配はいらない

あなた達の歌は 既に翼に綴られている》

聖霊の手帖のなかで

砂まみれの竜がやわらかな炎を吹く

信仰をお持ちなのですか

今 七面鳥が焼きあがりました

壺の中の 残り少ない霧

アルミニウムのコンピュータは 私の宝だから

通じたことのない 風の電話

私しか 入ることの出来ない 唯一の宙空

福島敦子

メロン

父は忘れてなんかいない
ほんとうに認知症なんだろうか

つじつまの合わない言葉のあいまに
いつもはつきりと言う

連れて帰ってくれ

両手を合わせて
拝まれる

何度も聞かされると苦しくなってきた
面会の足が遠のく

お見舞いにもらったメロンを
父に持っていわずに 台所で食べた

両手を合わせて
かみさまにお願いするように
すがりつく瞳で 言う

連れて帰ってくれ

かみさまは人間の願いを
どこいらへんでかなえてあげるのだろう

そんなこと 考えてもみなかった

かみさまって 願い事ばかり抱えて
つらいんだろうな

メロンはまだ 熟してなくて

かたい

割り切れない思いとともに

飲み込む

わずか十秒

いいことを教えてやるよ、
目をつぶってそのロープを握ってみな、
と言われて、
言われるままにロープを握ったのは、
眠くて頭がぼうつとしていたからかもしれない。
上から引っ張る力を感じてしばらくすると、
もう目を開けていいよ、
と言われた。
すごいだろう、
わずか十秒で
千メートルまで安全に上がれるようになったんだ。
それを聞いて、
へー、すごいなと思ったのは、
やはりよほど頭がぼんやりしていたのだろう。
しかし、それでも何か気になって、
真上に向かっていった視線を
少しずつ下げていった。
視界の下の方に小さな家々がちらりと映ったとき、
心底ぞっとして、
手を離したくなった。
怖いというのは、
そういうことなのだろう。
やばい。
間一髪手を離す前に目を開けた。
それが夢から覚めるもつとも確実な方法だから。
いつになく目覚めがよくて、
まだ寝ていたいとは全然思わなかった。

殺陣師の領分

その待合の壁には、諦念を喰い尽くしたグリーンバシリスクが張り付いていて、眼を閉じ、厳かな面持ちで間奏曲を聴いている。この辺りにしばしば雲水が漂着し、帰依ですら抛つことがあるのは、何時だって血の匂いが途切れることがないから。いくつかの反転の果てに透過性を獲得し、ついに白い背中を通り抜けていく恋情。巷説の窓枠は父と娘の諍いから派生したペイズリー柄によって、やがて隅々まで埋め尽くされてしまうことだろう。明日の号外に何が書かれるのかはとうに分かっている。言うなれば、信じることは背くことで、欺くことはただ贖うことだ。

極限まで単純化された代償行為を乗せて、黒い送迎車が寛永寺の裏手を走っていく。もはや、どんな黄金の矢をもってしても、引き戻すことはできないだろう。期待の砂は全て落ち切ってしまう、呵責の赤紙は配達記録を付して届けられた後だ。

ここでは、緋色の紐を無自覚に解くことによって、世界は斥力を得て閉じていく。むしろ、その紐をできるだけ堅く結び直すことによって、閉じられた世界が徐々に拡がりを見せていくことすらあることを、我々は知っておかなければならない。

迂闊にもパステルカラーを用いて地獄草紙を模写していく所作が、どれだけ人の心魂を回復させるかを知らなかった。貴人ならば活性炭くらいは常備しているのだから、客筋が手水に立つ気配を察知してから毒を仕込むのでは遅過ぎる。むしろ、事を急いで粹人と愚人の行灯を取り違えたら、全てが徒勞となってしまう。それでもまだ命の遣り取りが不足していると言うなら、道化から爆風を拝借するしかないだろう。どのみち影絵の中か、街道沿いでしか人を殺めることは許されていない。今、グリーンバシリスクは湯女の礼儀作法を半分近くまで食いちぎった所だ。

岩田英哉

寒山拾得

わたしの観察では
ひとの饒舌の原因は
死に対する恐怖心にある

死に対する恐怖が
日常の根底にあるとは
誠に不思議なことだ

わたしの発見は
沈黙は死を受け容れる行為である
ということだ

わたしの沈黙は
見よ、お前の土壌を
といたいのだ

わたしの沈黙は
見よ、言葉の生まれる場所を
といたいのだ

沈黙についてすら
言葉で言わなければならないという
そこ

そこが、寒山拾得の棲む場所である
と言いたいのだ

June 23, 2012

警報

ダムのはとりの小さな家で
暮らし始めてから随分経つ

ここには

ひとつの村が沈んでいると云う

藍色の水は真昼でもどんよりと濃く

いくらすこやかに陽光が降り注ぐとも

底を透かし見ることはけしてできない

だけど時折

そう たとえば

静かな昼下がりに

何の前触れもなく立て続けに

無数の気泡が上がってきては

水面で弾けたり

底の方から

黒電話の呼び出し音が

幽かに聞こえてきたり

乾いた土の上に

たった今しがた上がってきて

暫くそこに佇んでいたかのような

濡れた小さな足跡が

残されていたりするから

このダムの底に

かつて人が暮らし

そして今もお暮らしているかもしれない

ひそやかな村が沈んでいるのは

本当だろうと思うのだ

遠くから

夕方五時を知らせるサイレンの音

それは奇妙に歪んでいて

空の彼方から聞こえてくるせいだろうか

わたしにはどうしても

ダムの底から

何かが上がってくることをしらせる

警報のようにしか

聞こえないのであった

水島英己

汽水域

本当に大丈夫なの？

いつもはこんな体育会系のようなこと嫌いなのに。

やりたくないのはあなたでしよう、そう言えばいいのに。

図書館にある島尾さんの記念室を見学する、

その前に旧居跡に行く、その後に行こうか。

最初からそう言っているでしょう。

作家がその家族と住んだという家が

作家を愛する人々の努力で残されていた。

旧約の言葉が自筆で刻印された記念碑。

「病める葦も折らず けぶる燈心も消さない」

昨日、レンタカーとフェリーで行った加計呂麻島のビデオも図書館で見た。

泣いているの？

あそこで雨宿りしようよ。

図書館の先にマリア教会が見えた。

聖堂にはだれもいなかった。暑さとスコールをしのいで

古仁屋行きのバスを待つ。

原生林の濃い緑の山が落ちて来るように迫り、その反対には入江が連なる、

道は海と山の間を曲折と昇降を繰り返す、その先を隠しているよう。

レンタカーより、やっぱり楽でしょう。

でもバスの運賃より、レンタカーを半日借りた方が安かったね。

お盆前で、空気がなかったじゃない。バスは住用の道の駅に唐突に停まった。

マングローブは「命のゆりかご」だって説明があったよ。

ヒルギの落葉や種子を食べたり、木そのものを生息場所としている小さな生物たちの。

シオマネキ、フジツボ、ハゼの類など。

カヤックに乗るために、そんなことまでも勉強したの？

赤いライフ・ジャケットをつけた君は、あっという間に先頭のガイドさんの

すぐあとについて、上手にパドルを操りながら進んでゆく。

少年たちの舟の間を抜けることができずに、ぼくはぐるぐる廻る。

右に曲がりたいたきは左舷の方にパドルを入れて漕ぐ、

まっすぐ行きたいときは、どうするんだっけ。

そのうちに体の力が抜け、ただ揺られている。

赤ん坊のように。母に抱かれて口を開けて寝ている赤ん坊。

川と海が抱き合う河口のマングローブ。

汽水域に出たんだ。なにか匂うけど、その匂いを言えない。

二人乗りにしようよ。いいえ、一人がいい、と君は言った。

海と水の大きな混合が一人を浮かべる。パドルが水に入ると、水がパドルを重くし、その重さが両手から脚に伝わってくる。

両側にヒルギの群生―緑葉で遮られたトンネル状の水路。

木漏れ日が一人の君を、「漕ぐ人」の絵に変える。

デジカメをロッカーに入れてきたのを後悔する。

ゆっくりと夢の中のように漕ぐ。そして、

すべての人が静止する、少年たち、二人乗りの老人夫婦。

すべての流れと速さが混ざり合い、淀みが生まれる。

ガイドさんがカヤックから降りて

浅い水の中に立ち、静かに説明をはじめ。マングロープの意味、ヒルギたちの性質、一つの葉が他の葉に代わって塩分を集中的に吸収して落ちるなど、犠牲という物語、生きて流れることになつかしい暗喩、シオマネキが掘った穴に奇蹟のように着床する生の種子のことなど。

眠くなる。水中の垂訓は終わった。帰還のためのパドルが淀みを分けて行く。ゆっくりと、そしてはやくなる。

いつのまにか、君はまたトップに出ている。

水と水が出会うところ、というレイモンド・カーヴァーの詩を思い出す。

The places where water comes together with other water. Those places stand out in my mind like holy places. それらの場所、心の中で聖地のようだ。

息づいている場所。そういう場所をぼくは持っているのか。

加計呂麻島、呑之浦は確かに島尾敏雄にとっての聖地に他ならなかった。

そのへ深く奥へ切れこんだ入り江の潮の干満のように、

死と生は出会いと別れをくり返し、そこに謎のような淀みをつくる。

淀みは場所なのだ。

パドルを入れると

淀みがゆっくりと一人、一人を、あるいは老夫婦たちを

送り出すのだ。ゆっくりと、そしてはやく。

さかのぼっている、そして、くだっている

曲がっている、廻っている、でもいつの間にか元に

そう、背筋を伸ばして漕ぐ、前や後ろに寄ったりしないで

住用川と役勝川が流れ込む住用湾。

その広大な干潟がマングローブの母で、
奄美にのみ生息するリュキュウアユの母でもある、彼らは

湾の汽水域、君のカヤックの水路、そこに集まり遡上のために
その初期の生活を送るという。初期生活者は淡水に馴致しなければならない。
だから、海と水が混ざるところ、低塩分で、

しかも低温である汽水域が君にとっての初期の必須の生の訓練の場所になったのだ。

稚魚の前、孵化の後の君を、何と呼ぶのだろうか？ 初期生活者ではなくて。

仔稚魚^{しちぎよ}？ 君の心臓が透けて見える。

血が君の中で虹を架ける。

ほら眼を覚まして、ついて来てよ。

眠くなる、汽水の上で眠くなる。

母の乳の匂い、放たれた精液の匂い、放たれた幾万の卵の匂い
役勝橋の岩の藻の匂い、瑠璃カケスの糞の匂い、ハブの蹲る匂い

あなたはそこに、いなさい。

君はゆっくと、そしてはやくカヤックを漕いでゆく。

あなたの場所に、〈深く奥へ切れ込んだ入り江〉の汽水域に！

ぼくは眼を覚ます、背筋を伸ばして遠くを行く君に

沈黙の中で問いかける。

「鮎、君が人間なら、留まることと出発のどちらを選ぶ？」

「どちらも、と笑いながら君は答える。

選ぶのも選ばないのも同じ、

場所にとっては、と。

博物館のある通り

むかし巨大な造船所があった跡地の、細長い船渠せんきょの残る街区を外れ、いつも夕ぐれに輝いているような影を見せて、博物館が一つ、孤独にそこにあった。通りには繁体文字の看板と簡体文字の色とりどりの看板が、折り重なるように自らを主張して、そこを訪れるものに一種の身じろぎを与えている。通りは、祝祭のさいには車の通行ができなくなり、代わりに道路の真ん中まで簡易なテーブルや椅子が並べられる。ビールが泡立ち、それを縫うようにして神輿が練り歩いたり、ジャズの生演奏が通ったりするのだ。そのあいだを日本語、韓国語、ヒスパニック、広東語、英語が飛び違う。博物館までは地下鉄を使えば比較的容易に行ける。だが、地下鉄構内と博物館を結ぶ通路は長い長い勾配で直結していて、貧血気味の身としては、なかなかそこをたどってゆくには苦勞させられた。博物館の外観はいちおう北方ルネサンス様式と、街のガイドには書かれている。明治期のお雇い外国人の手になるものと一見思われそうだが、設計も施工もみな日本人であるようだ。館内は基本的に階段で昇降する。天井は高く、全体に薄暗い。冷房がそんなに強力でもないのに、四季いつでも幽かな寒さを感じるのは、あるいは展示物の種類にもよるのであるろうか。私がある感をもつとも強く覚えたのは、大病をして一年以上にもわたる闘病を終え、退院してから妻と見た国宝秋草文壺であった。もとは平安時代人の骨を納めた骨壺であるという。常滑焼の優美にして雄大な、なめらかなフォルムの表面には、さまざまな秋草と、蝶と、蜻蛉と、鈴虫などが線刻で描かれ、虫の音や風の音までが耳ぎわに迫ってくるようで、この一年の間に亡くなっていた一人きりでない療友たちのことが、こもごも思われてならなかった。このとき、ある、幽かだが確実な寒さをはつきりと感じたのだ。もう一つはその二、三年後、K県の神像たちを見たときだ。寺ならば秘仏とでもいうところであろうが、神社深く秘せられて公開されなかった神の像がこの博物館で公開展示されたのだ。ふつうは神璽とか鏡という形で鎮座する神の象かたちが、こうした木彫として巫女とか童子とか老人、僧侶のような姿でミアレすること自体が驚くべきことである。それらの多くは面貌の破損、あるいは腐食しえぐれた胴や手脚の欠損ものすぐ、それが却って神というものへの途方もない畏怖を感じさせた。なかでも絵画で表現された「綱敷天神像」の凄まじい怒りの表情に出遭って、真の冷気を覚えた。われわれはこういう怒りの前に、久しく撃たれてはいなかったのではあるまいか。このとき、冷気は明晰でおびたらしい群として、針のように、結晶のように、妻と私の目の前に現前していた。われわれはなぜか清涼なものに撃たれたあとのようにうなだれて、館構内のコの字形の対角線上にあるフロアに入っひと休みした。知的障害のある子が運んできたコーヒーに口をつけ、徐々に冷気がほどけてゆくのを感じていた。海のほうからは、ランチが鋭いホイッスルのような霧笛の声を上げるのが聞こえてくる。シーボートの最終が発着し、あとはナイト・クルーズ船上のお祭り騒ぎが始まるのだ。

われわれもここを出て、極微の悪のように華やかな忍辱にんじゆくのシャツを着た夏服で、暗く輝く街のほうへ降りてゆこう*。

*暁が来たら俺たちは、燃え上る忍辱の鎧を着て、光りかがやく街々に入ろう。(小林秀雄訳、ランボー『地獄の季節』より)

水の庭

A 煉瓦倉庫群の諸施設が完成してからは、そこによく散策に出かけた。海上保安庁の巡視船が停泊している側には、A 煉瓦パークの中庭のような一種広漠たる拡がりがあった、そこで旧新橋駅発、旧国鉄Y 駅から枝分かれしてきた、引き込み線の先端部が延びていた。そこには旧煉瓦倉庫施設の一部発掘跡が、記念として公園のようななかたちで残されていたり、引き込み線の先端部分にはある種のプラットフォームのような面影の停車場跡が残っていたりする。考えてみれば、倉庫群跡は同時に積出港でもあったわけで、貨物船や貨客船の出入りも繁かつたであろう。貨物とともに人も、そのかみは船に乗り込んだはずだろうし、そうすると、なるほど、旧新橋駅方面からY 駅を経由して、この港に残るプラットフォームに鉄道列車から直接に降りて、そのまま海彼へと旅立つ人士も多かつたに相違ない。この場合、その多くは東京方面からの紳士淑女であったことを遙かに想う。倉庫群の中庭は舗石で敷き詰められてあつて、はなはだしく歩きづらい。杖を突いてようやく海に面した正面の広場に出る。正北に拡がる真正面の海は、右はホンモク、左にはツルミの二本の高塔を見るが、しかし比較的浅いホリゾントを持つ海景であり、それは海というより一種の湖面、ないしは広大な庭園を思わせるものでもある。A 倉庫群の海抜は、ノゲの裏山やモトマチの背後に聳える丘とは掛け違つてはるかに低く、海面とすれすれといっても過言ではない。それでも広場から見る港の光景は、われわれの眼の一望の下におさめられてしまう。それは庭といつても「動く庭」だ。動く水面、寄せ引く波、潮の干満を基層として、前後左右の縦横に通過し、波を蹴立ててゆく大中小の船舶、動くパイ、ときおり交錯する汽笛や霧笛、時間が来ると点灯し、また消灯する照明やフォッグランプの点綴、いつの間にか転換変化している海上信号の記号やマークなど。われわれはこれら動くものに類することを、反対に動かない庭園のさなかに見てその現象、変化、フェノメノンを感じることはあるけれど、たとえばそういった「動き」の顕著な例は、竜安寺の石庭などにしばしば見ることができる。それは、石という無機物の相対化ともいえる青苔ではならないと、厳に戒められているという。それは、石という無機物の相対化ともいえる青苔の繁茂とか、石と砂、石と石との相対関係そのものを徹底的に看取することによって、初めて得られる動き、である。すると、見よ、却つてこの海面という動く庭のなかには、むしろ動かざるものの静謐さが湛えられているではないか。《今歳湖水の波に漂。鳩の浮巢の流とゞまるべき芦

の一本の陰たのもしく、軒端茨あらため、垣ね結添などして、卯月の初いとかりそめに入し山の、やがて出じとさへおもひひそみぬ。さすがに春の名残も遠からず、つゝじ咲残り、山藤松に懸て、時鳥しばく過る程、宿かし鳥の便さえ有を、木つゝきのつゝくともいとはじなど、そゞろに興じて、魂呉楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申にそばだち、人家よきほどに隔り、南薫峯よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山、比良の高根より、唐崎の松は霞こめて、城有、橋有、釣たるゝ舟有。笠とりにかよふ木樵の声、麓の小田に早苗とる哥、蚩飛かふ夕闇の空に、水鶏の叩音……」。ちょうとこんなふうに、この港湾の一部始終を一日見ても眺め飽きない。ふつうわれわれは、動くもののなかに動くものだけを、動かないもののなかに動かないものだけを看取するのではない。動かないものただなかに動くものを見ることからさらに一步を踏み越えて、動くもののなかに、動きながらなお静謐でありつづけるもの、すなわち絶対的な揺動のなかに揺りかこのように揺られつづけているわれわれ、つまり海水の、動かざる金剛の一滴が水晶のようにふるえつづけるのを見る。

ゴッホの

百姓のあの靴の祭礼が来た

空も紫水晶の透明なナスの

悲しみの女のかすかなひらめきに

沈んでいるこの貴い瞬間の

野原の果ての中に

栗林が絶望をさげんでいる

またあの黒土にまみれて

永遠を憧れたカタツムリが死んでいる

青ざめた宇宙のかけらの石ころも

眼をつぶって夏のころ

乞食が一度腰かけたぬくみを

まだ夢みているのだ

土にとり残された一つの黄金のイガは

熟したイチジクのように口をあけて

秋の女神の残忍な実の

かくれどころをひそかにほめかす

人間の永続への

なげかわしい

祈りを

* 詩は西脇順三郎《秋の歌》全行。本文引用部分は芭蕉『幻住庵記』より。

岩田英哉

Hart Crane を読む。(承前)

最後に、第3連を見てみましよう。

The black man, forlorn in the cellar,
Wanders in some mid-kingdom, dark, that lies,
Between his tambourine, stuck on the wall,
And, in Africa, a carcass quick with flies.

【表の訳】

その黒人は、地下室にひとりになって、
壁にかかっている彼のタンバリンと
アフリカにあつて、蠅がたかっている
死んではない体との間にある、暗い
或る中間の王国をさまよう。

【裏の訳】

男色の罪にけがれた男は、地下室の、地獄の中で
孤独なまま、自分のものだといいたい、前位置に
壁のように立っている男のそのタンバリン形の
性具と、それから、何度も行きそうになりながら、
まだ絶頂にまで行かずに、従ってまだ生きていて
死んではない、射精をこらえている男色者、
肛門性交に至らない男色者との間にある
男色者の中の王国をさまよう。

【解釈】

some ㄱ Webster ㄱㅅㅅㅅㅅ

Eymology:

Middle English *som*, adjective & pron. from Old English *sum*; akin to Old High German *sum* *some*,
Greek *hame*• *somehow*, *homos same* - more at *same*

ㄱㅅㅅㅅㅅㅅㅅ Crane ㄱㅅ homos ㄱㅅㅅㅅㅅㅅㅅ 語源 語釈にホモの意に掛けて、この語を使つてゐる。

Same も同じ使ひ方をしています。ですから、Crane の詩の中に、some や same という言葉が出て来たら、それは例外なく不定冠詞の a と同じ意味を持たせているのです。この some や same は To Brooklyn Bridge にも頻りに出て参ります。従ひ、some mid-kingdom とは、男色者、同性愛者の中間の王国という意味になります。しかし、中間の王国とは何ぞしよつか。

男色者達が、性行為をしているときに、中世の騎士物語を演じていることは、上に書いた通りです。ですから、some kingdom、男色者の王国なのだと思います。しかし、mid とは何か。これは、Crane が、To Brooklyn Bridge にも出て参りますので、そこで詳述しますが、また別に男同士性の行為の様子を、太陽系の星の運行に喩えていたことを考えて下さい。そうすると、3つの星があつて、この穢れた罪深い男、黒い男は、太陽、地球、月のうち、まん中の位置にいて考えることができます。いづれにせよ、太陽は動かぬ位置にあり、地球は太陽を周回し、月は地球にいつも表だけを見せて自転せず、尻を向こうに向けたままの位置にいる星です。

(太陽の位置にいる男は、支配者であり、自分の前に列をなす、肛門性交の男色者達に号令を掛けて、リズムをとり、前に後ろに、右に左に、男色者達にステップを踏ませて、その性行為を率領するのだということが、To Brooklyn Bridge を読むと、よくわかります。男色者は、Chaplinesque の que のことを、即ち、男色者達の肛門性交の数珠つなぎのことを、また別名の暗号は bridge、橋と読んでいきます。)

この男の位置は、地球であると、しておきましょう。太陽のペニスをくわえ、尻には月のペニスが入り込んでいる状態、それが、wander in some mid-kingdom ということだと思ひます。

橋、Wall は、

something resembling a wall (as in appearance, function, or effect); especially: something that acts as a barrier or defense

この文から、太陽の位置だとして、突っ立つてくる男のペニスを被さつてくる性具と解釈します。その性具の役目は、地球の位置だする男色者の舌や手の刺激から、早へ行つてしまふ(射精する)のを、なだめし遅くする、即ち、something acts as a barrier or defense という意味です。

Africa とは、何故アフリカなのかしらつか。これもこの語を深く調べてゆくと、continent of the eastern hemisphere S of the Mediterranean & adjoining Asia on NE area 11,677,239 square miles (30,244,049 square kilometers)

この、東は、この半球の continent (大陸という意味に普通はいうもの)を、更に continent を調べると、Crane は、contenance というかなが、self-restraint; especially: a refraining from sexual intercourse

この意味を Africa という言葉に隠しているのです。セックスを我慢するという意味です。その思ひつて見る、Africa にも A という文字が入っている。だから、アナル・セックスを我慢す

るという意味になる。
このように考えて来るよ'

And, in Africa, a carcass quick with flies.

とは、何度も行きたうになりながら、まだ絶頂にまで行かず、従ってまだ生きていて死んではない、射精をこらえている男色者、肛門性交の完成に至らない男色者という意味になる。

Fliesを'

a brilliant, imaginative, or unrestrained exercise or display (a flight of fancy)

とこのようにもどきると思いますが。

さて、こういうわけで、表の訳と裏の訳を、それぞれ並べて、この第一章の、Hart Craneを理解するための、まとめと致します。

【表の訳】

とある地下室に、ある黒い色した男が独り

その男の興味と関心が、

世界が閉じた扉なのか、それとも扉が閉じて世界を締め出したのか

その扉の上に、遅れた(遅い)判決文をしるす。

吸血の藪蚊共が、ある壘の影の中で、休み無く、行ったり来たり、登ったり降りたり、

そして、一匹のゴキブリが、床の中のある割れ目に、身を伸ばして、架かっている。

イソップは、何かに駆られて沈黙考しているうちに、亀と兎のいる天国を見つけたが、狐の尻尾と牝豚の耳が、イソップの墓穴を頂点にもってゆき、そうして空気に触れて呪文を混ぜる。

その黒人は、地下室にひとりになって、

壁にかかっている彼のタンバリンと

アフリカにあつて、蠅がたかっている

死んではない体との間にある、暗い

或る中間の王国をさまよう。

【裏の訳】

男色の罪に穢れた男色者が秘密の場所、地獄か地下室ともいうべき場所にいる。

男色者の興味は、世間から閉め出された、あるいは男色者が世間に対して締めて閉ざしたドアの上に、遅い判決を書きしるす。

ペニスの陰で、蚊がさすような微妙なトス、ペニスを下から上へと

快楽を感じるように撫で上げる、そのことよ。そうして、

ペニスは、大きくなって、この地獄のフロアーで

男色者の尻の割れ目に突っ込んで、目一杯鱈えんごも張り出すのだ。

イソップ（男色者）は、尻を上げてAのポーズをとっているが、強いられて心の中で静かに味わっている、兎と亀の天国、すなわち感じてはやく行くのが勝ちなのではなく、いくのが遅い方が勝ちなのだというお話通りの天国を発見するし、狐の尻尾のブラシと牝豚の耳で、イソップが快感の絶頂で死に到るように感じさせる。周りで、行くのがもつと遅くなり、絶頂感が長く続くようという呪文を、実況中継して、そこに混ぜ入れながら。

男色の罪にけがれた男は、地下牢の、地獄の中で
孤独なまま、自分のものだといいたい、前位置に
壁のように立っている男のそのタンバリン形の
性具と、それから、何度も行きそうになりながら、
まだ絶頂にまで行かずに、従ってまだ生きていて
死んではない、射精をこらえている男色者、
肛門性交に至らない男色者との間にある
男色者の中間の王国をさまよっている。

了

マイケル

単管の作業小屋ができあがって一ヶ月ほど経ったところからだろうか、猫の姿を見かけるようになった。うす茶色の、あまり毛づやのよくない野良猫で、首輪をつけている。道のろろ歩いてきて、風呂小屋の脇のゆるい傾斜をのぼり、六畳の寝泊まり小屋の前を素通りし、どうやら作業小屋の奥の二十畳ほどの材木置き場に入入りしているらしい。

道のあたりから目に入ることもあるが、ふと気づくとすぐそばにいる、という感じで遭遇する場合がずっと多い。むこうも、ふと気づくらしくて、そそくさと倉庫の材木の下にもぐり込もうとしたり、知らんぷりして引き返すふりをしたりする。気持は動揺していると思うが、足取りはのろのろのままだ。引き返すふりというのは、そのすぐあとでまた遭遇することがあるからだ。

名前はマイケル、ということは隣りの六十七歳の男性から聞いて知っていた。近所の六十七歳の女性が餌を与えていて、首輪もその人がつけたということも隣家の男性が教えてくれた。

もう一匹、黒っぽいぶちの猫を見かけることもある。名前はジェームズ。どことなくやんちゃで精悍な印象があるので、おそらくマイケルより若いのではないかと思う。ジェームスは首輪をつけていない。

わたしの敷地の西側は百坪の空き地、南側は三百坪の空き地になっていて、夏のあいだは雑草が生い茂っている。東側は道路をはさんで南北に細長く春楡の林が続いていて、北側の道路をはさんだ向かいに、六十七歳の男性の家がある。マイケルに餌をあげている女性の家は、西に百メートルほど離れたところだ。

小型の愛犬を連れて散歩している彼女と、短い立ち話をすることがある。彼女は、父親

の介護のために毎週、札幌まで電車で通う生活を十年間続けてすっかり体を壊し、ここで温泉に入り、散歩をしながら回復を図っている。だいぶ良くなつたけれども、まだ定期的に短期入院をする必要があるのだそうだ。

愛犬との散歩は、朝早くと昼間と夕方、あるいはそれ以上欠かさず続けていて、毎日何度か見かけることもあるし、しばらく姿を見ないこともある。散歩のルートをいろいろ変化させているようだ。草むらのなかに踏み入って愛犬を走り回らせている彼女を眺めていると、年頃の女性の匂うような若々しさを感ずることがある。姿勢がよくて、歩く姿が美しい。がたがたになった体はこの人にはふさわしくない。なんだか、断固としてそんな思いが浮かんできてしまう。彼女自身もまた、体を壊したことをまだ本当には、心に受け入れていないのかも知れない。

近所の人の話では、マイケルはわたしのところだけじゃなくて、幾つもの倉庫を渡り歩いているようだ。隣家の男性が露天風呂に浸かっている。頭の後ろをかすめる気配があるのでびっくりして振り返ると、マイケルが歩き過ぎていくところだったということもあるらしい。家のなかに入ってくることもあるという。近所をひとまわりするだけでも何百メートルかになるはずだし、のろのろした足取りから想像するとそれだけで精一杯と思われるのだが、一度、かなり遠く離れた町道を歩いているマイケルを見かけたことがある。道ばたに体を寄せ、こちらを振り向いて、わたしの車が走りすぎるのを待っていた。道ばたで狐を見かけることもよくあるので、襲われたらどうするんだろうと心配になつたけれども、反撃を怖れて狐も、大きい猫には簡単には手を出さないのかも知れない。

隣家の男性のところに入入りしている話を

聞いていたので、わたしもちょっぴり期待していたのだが、結局、四年のあいだ無視され続けたことなる。テントとかブルーシートの小屋とか、ろくな建物が建っていなかったのだから無理もない。倉庫を建てて、ようやくわたしも野良猫たちに認知されたということだろうか。

マイケルが倉庫をどんな目的で利用しているのかは分からない。雨を避けたり暑さ寒さをしのいだり、地べたにじかに寝転がってもいいし、材木の上で昼寝をしてもいい。天井の方には断熱材を重ねて保管してあるので、そこだともっと暖かいはずだから、季節に応じて寝床を選択できる。わたしでさえ、もうここを家にしてしまったら？ と友人たちに、なかば本気で言われているほどのだから、マイケルにとっても悪くない住処になるはずだ。けれども、いつてみれば間借り人、あるいは同居人みたいなものなのに、わたしに気を許すつもりはないらしい。喉をならしてすり寄ってくるような行動はいっさいしない。何回目かの遭遇のときに「マイケル」と声をかけたことがある。マイケルはわたしを見つめたまま、尻尾を二三次振ってひと声、にやあと答えてくれただけだった。二度目は、尻尾を一回しか振ってくれなかった。たいていは、そしらぬ振りをしてわたしのそばを通り過ぎ、やばい、という気配を背中ににじませ、ゆっくり慌てて材木の下にもぐりこんでいく。倉庫に入らずに素通りすることも多い。ジェームズを見かけることは、マイケルよりもずっと少ない。二匹一緒にいるところは目撃していないが、前後して倉庫に入ってしまった日もあるので、仲がよくないわけではなさそうだ。三匹目の、白黒の猫が一日だけ出現したこともある。そのときは夜になって鳴き声が聞こえ、わたしの倉庫が彼らの貸し切りみたいになってしまった。翌朝、白黒の猫が、うらめしそうにわたしを振り返り振り返り道を遠ざかっていき、それから一度も姿を見かけていない。

秋の気配がし始めた頃、散歩中の彼女に声

をかけた。

「マイケルがわたしの倉庫に出入りしてますよ」

「あら、そうなの！」

彼女の声はいつも活力に満ちていて、気圧される感じがするほどだ。ステロイド剤と縁が切れなかったり、ときどき入院の必要があったりする体とはとても思えない。若かったころの、病気じゃなかった彼女はものすごく魅力的だったのではないだろうか、とふと想像してみる。

「のろのろしてるでしょう」と彼女が言う。

「のろのろしてますよね」

「もうよぼよぼで、今年はまだ駄目かも知れないって、毎年思うんだけど。でもね、走るとものすごく早いのよ」

「えっ？ 走ることがあるんですか？」

「そうなの、びっくりするくらい早く走るわよ」

とても信じられない。なぜか、滑稽な姿で走り去るマイケルが想像されて、笑ってしまいうそになる。のろのろと生きているわけではなくて、たまたまわたしと遭遇したマイケルは、のろのろできる時間のマイケルだったわけだ。

「気がつかなかったかしら？ いつも傷だらけで、このあいだも、きつねにやられたのかジェームズたちと喧嘩をしたのか、足が曲がるくらいの大怪我をしたのよ。でも野良猫は、ほんと治りが早いわねえ。」

彼女の話では、ジェームズは三歳の雄で、こちら辺の、数匹しかいない猫のボスをやっているらしい。マイケルは、いじめられる側なのだそうだ。

「冬は、どうしてるんでしょうねえ？」

「冬は、湯たんぼの上ですっと寝てるわよ」

「外には出ないんですか？」

「もちろん、ぜんぜん」

冬はどうやら、わたしの倉庫に遊びに来てくれないようだ。ネズミが喜ぶに違いない。

ハイド氏の庭を歩く ―石原明句集『ハイド氏の庭』について

石原明さんとの付き合いは、岩田英哉・水島英己氏、それから私も加わった、日本蛇行協会、略して日ダキョウという、酒をひたすら飲んで蛇行して帰るだけの会の、会員というか、連衆というか、まあそんな間柄である。といって、酔って揃み合うのが趣味ということではない。石原さんはネット上でのハンドルネームを風の族というので、以下、風さんとお呼びするが、風さんの飲食に関する鋭敏な感覚には驚くべきものがある。当然、酔って揃むこととは無縁といってよい。

われわれは、学芸大学の蕎麦屋や、飯田橋の沖縄料理屋、藤沢の魚料理の店だとかに出没し、佳い酒だといっては料理をむさぼり、旨い肴だといってはまた杯を空ける。そのあいだに誰かしらがそつとメモ帳をちぎり、三吟ないしは四吟付け連句が始まったりするのを恒例とする。

一句立ての発句だが、風さんの最近のではこんなものがある。「明日からは何処の空の桜かな」。これはたとえば蕪村の「几^{いかるば}巾^{きん}きのふの空のありどころ」を掠めていると思われるが、いわば俳諧の根源とも言える本歌取りにほかならないのであって、剽窃とは似て非なるものであるのはいまでもない。このことは氏の句集『ハイド氏の庭』にもしばしば見えるところで、「竈馬幼年探偵団ちりぢりに」においては、久保田万太郎の「竹馬やいろはにほへとちりぢりに」が掠められているのに通うものだろう。

句の読みという点からいえば、「立秋や性愛ひとつまだ熟れず」の「立秋」のうちに、たとえば作家・立原正秋という名の隠された暗号を見てしまうのは私のひが目であろうか。立原も性愛の深みを知り、鋭敏な舌と審美眼を持っていた。けれど、まあ、これは私のひが目であろうとは思ふ。

ところで、死と性愛というのが『ハイド氏の庭』の表看板だとすれば、「花間に江波杏子の儀式かな」という句にはそれらが凝集されている。これはしかし、ただちに二つの方向に分化してゆく。一つには自己愛的なもの。句で示せば、「青年の群れおほむらさきの色まとふ」「くちなはや青春と云ふ手術痕」「人界を抜けきれるはず夏燕」「飛魚のガラスの鱒の青春や」「カクテルに秋の地球を絞りけり」などがそれにあたる。もうひとつは、けつこう惚れられつぱいとおぼしき風さんも、他者性というか、女人の具体性の前ではいささかたじろぐ趣があつて、次のような句を並べてみるとそれがやや歴然となる。

はなびらの光にぬるるさくら雨

死んだのと浮いて知らせる金魚かな

謝らずどこまでもむく青林檎

冬木立笑つて済ませられないか

どちらかが死んでゐるはず初笑

味噌の香の廊下より来る初明り

これらを、私は風さんの実像や裏看板とは言わないが、ゴシップ記事を読むような、はなはだ俗っぽい関心からたどつてゆくと、一篇の完璧な恋愛私小説が出現しはしないか。ここにはまさしく起承転結がある。色男はつらいのである。しかし句は、あくまでも一つの高さ、高雅さを保っているのだが。

さて、この後半三句を見てみると、矢つ張り俳句界の或る巨人の影がちらつくのを認めざるを得ない。その影とは、高浜虚子である。次に挙げる句に、否応もなく虚子の幻の警咳を聴くのである。

春雷や罅割れしるき憤怒仏

巫山へと虹をかけるや伊吹山

半夏生仏金色でありぬべし
蛭来て掌から驟雨となりにけり

白神をやがて墨絵の驟雨かな

牡丹花のうすくれなゐや独り通夜

あの町はきつと無いのだ虹二重

花芒危ふきまでを活けてあり

打たれやすき蠅晩秋に去らしむる

金木犀すみずみまで闇澄みしかな

初夢に誰も出てこぬ潔さ

昨日から目詰りの塩振つてゐる

まだまだほかにも風さんの佳句はあるのだが、それはそれとして、ここに示された句例が、実はこの句集における本流をなすものだといえよう。「虹二重」と「目詰りの塩」の二つを除き、ほぼ文語旧かなを用いている。「春

雷」の句は、詩の疎密という点からいえば、疎なる関係を重んじる歌や句の伝統から見ても少々外れるものがあるのだが、虚子的な重さとの均衡を図ったのであろう。「巫山」における「や」と、「白神」における「を」の働 きには、私など限りなく心惹かれるものがある。これは口語新かなを用いるのではとても かなわない。「蛭来て」「牡丹花」「虹二重」「花芒」「金木犀」では、先に言った死と性愛の テーマがむしろ匂い立つようで、色気とは本 来こんなものであったなあという感を深くす る。むきだしと性愛とは元来なじまないもの なのである。

騒奥に高校あるらしき」となるのではないか。 ところで、やはり風さんの代表句は、ここに挙げておきたい。

そこまでの岬と知りつつ蝶とゆく

まるで田村隆一の「腐刻画」のような処女作ではある。が、田村と違い、風さんの歩みにはお住まいの三島の水や空気、駿河の海のよ うなゆったりとしたものがあって、永遠が恐怖と隣り合わないのどやかさを感じる事ができる。風さんは岬ではなく、海という永遠に向っていたのである。矜持と気取りと諦念さえ仄見えて、人を佳い気持ちにさせる句である。

*花森こま主宰句誌「逸」に掲載。

ここから少し転じて、「死亡記事蝶より小さく切抜かれ」を見ると、詩を書く私などには、思わずううむと唸らされるようなメタファーの巧みさと受け取れるのだ。つまり死亡記事の概念そのものが、小さな蝶と化して中有を飛びさすらってゆくようなのだ。これはイマージュというよりは、シンボル化の働きである。また、「青葉若葉青葉若葉と風の神」には、葉群の動きが文字上にさながら再現活写されていて、錯覚とは分かっている。まるでそこに「絵」を見るようなのである。作者のしてやったりという顔が、そこには覗く。このさらに輪廻していった形が、「青葉

confidence

台風が来ると、雨の中を買い出しに行く。朝、牛乳のパックを開けるより早く、どうせ台風は行ってしまうのに。(後藤)

雪が降るまであと一ヶ月半ほど余裕があるのだが、早々と片付けに入ることになった。リビングの屋根をかけるまで行きたかったのだけれども、古材の刻みが意外にというか、予想どおりというか、時間がかかるのが分かったので、慌ててやって仕事が雑になってもつまらないし、来年に回して、周囲をきれいに片付けて気分を新鮮にする作業に着手することにした。これはこれでまたやりがいがあった。なんだか、片付けばかりやっている人生のような気がするけれども。(木村)

ここ数ヶ月で私の身の上に起きた特筆すべき事柄といえば、45歳にして*ほんたうの*ガールフレンドが出来たことと、それに伴って、学生時代から使ってきたMacを捨ててWindowsマシンに乗り換えたこととでしよう。そのWindowsマシンとは、Amazon サーフインをしているときに2万7千円で買ったhpのノート、Pavilion g6-1300AUなのです。ちなみに巷間ではWindows 8の足音が聞こえ始めていますが、ガールフレンドに「出たら買っているかな?」と尋ねてみたところ、「Windows 7があるんだから、必要ないんじゃない?」と言う答えが返って来ました。(野村)

いつものように暢気に歌舞伎のことを書く気分ではないのだが、そういう気分だとらうことはTwitter (@nyagao_jongtail) を見ていただければわかるので、歌舞伎のことを書く。

染五郎の転落事件でとにかく驚いたのは、「本人はせりが開いていたことを知っていた」、「本人のミスだ」、「裏方には過失はない」といったことを父親の松本幸四郎が次々に言っていたことだ。そんなに何度も舞台を見たことがあるわけではないが、いつも上の方の安い席で見ているので、使ったあとのせりがすぐに塞がるころは何度も見たことがある。開けたまま演技を続けるなどという危ないことをすることはまずないのではないかと思う。だとすると、幸四郎は、裏方をかばい、警察沙汰になるのを避けたのではないか。裏方への配慮、ほかの役者(とその家)への遠慮、歌舞伎界に権力が土足で踏み込むことの忌避、その他いろいろと動機は想像できるが、さすがにそこまで言い出すと想像が過ぎるというものだろう。ただ、この想像が、主人のために子どもの生命を差し出すとか(染五郎が九月に演じるはずだった松王丸はまさにそういう役だ)、とかく極端な筋立ての目立つ歌舞伎の舞台そのものと妙にシンクロしているような気がするのには、私だけではないだろう。(長尾)

今回で、わたしのHat Crane 論の連載は終了です。しかし、最初に目次で示しましたように、本篇は続いております。この続きは、いろいろThe Bridge を読むわけですが、わたしの次の詩のブログ「詩文楽」をお読みいただくか、また、ミッドナイトプレス社のホームページに起こし下さい。それぞれのURLアドレスは以下の通りです。

詩文楽:

<http://shibunraku.blogspot.jp/2012/06/b-rooklyn-bridge.html>

ミッドナイトプレス:

<http://www.midnightpress.org/midnight-poetry-lounge-%E3%83%AC%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%88/>

また、寒山拾得という題の詩についてですが、寒山拾得という人間像は、わたしが10代のときに、わが胸中に胚胎した人間像で、わたしの理想の人間のひとり、いやふたり、です。多分、森鷗外の短編「寒山拾得」を読んだことが切っ掛けであったのだと思います。以来、わたしのところの中で、苦楽を共にし、一緒に生きてきた人間です。その間44年。やっと詩になって、感慨無量です。信州の詩人根石さんが褒めて下さって、うれしかった。寒山拾得2、寒山拾得3と、連作になることを密かに期待しています。(岩田)

イワシをいただき、南瓜と茄子と胡瓜とオクラと青紫蘇を畑から採ってくるという物に行かなくても暮らせます。(福島)

最近、三年間続けた夜勤の仕事をやめて、別の仕事に転職しました。陽光の下で見る、自分のあまりに不健康な白い二の腕に違和感を感じます。此の頃読んでいる詩集は、小柳玲子「雲ヶ丘伝説」です。十月一日から一泊で、兵庫県は姫路市へ旅行することとなりました。初めて降りる土地です故、戸惑いでいっぱいですが、この旅行の記憶を素として、小品のようなものでも書ければいいな、と思っております。今回は寄稿させていただきまして、ありがとうございます。ました。(吉田)

この夏の徳之島帰省と奄美大島の旅のレポートのような詩を書きました。「汽水城」がそうですが、あと一篇あります。これらを含んだ新しい詩集を準備中です。来年の春までには刊行できるようにと自分に

プレッシャーをかけています。(水島)

つい先日、第三詩集の本文、表紙・カバー・帯などが全て校了となった。この詩誌が発行される頃には、既に刊行と謹呈分の発送が済んでいるはずである。ところで、これまでも詩集の原稿をまとめてしまうと自分自身が抜け殻のようになってしまい、しばらく作品が書けなくなるというのを繰り返して来たのだが、今回も前作の「戦禍舞踏論」を書いてから約三ヶ月間、ずっと新作を書くことが出来なかった。従って、本号は新しいスタイルを模索する充電期間という意味合い(これも一種の言い訳に過ぎないのかも知れないのだが)もあって、直前まで休載させて頂くつもりでその旨をお伝えしていたのだが、締め切りの約一週間前に倉田さんから再度お電話を頂いた際、何故か反射的に「何とか書いてみます」と答えてしまった。今号の掲載作「殺陣師の領分」はそのような経緯で、抜け殻同然だった自分に敢えて鞭を打ち、氣力を振り絞って書き上げたものである。(秋川)

この夏から、詩の勉強会のようなことを始めている。若い人が中心で、横浜、ないし横浜近郊在住者がメンバーだ。名づけて六角橋詩人会という。いわゆる詩人会に対するクリチックという意味合いも、なきにしも、ない。詩というものを基礎から考えて、それぞれの作品への「評価」よりも、その作品の持つ世界や論理などを「解説」してゆきたい、という姿勢である。その間、場所はバーなので、飲みつつ食いつつ、詩の朗読も交え、七人前後で声を囁らしてディベートする。すでに二回を終え、この十一月の最初に三回目を迎える。横浜在住者で興味のある方は、作品一篇を持って覗きに来てはいかが。連絡は倉田まで。バーはワリカンです。(倉田)